

天辺地

(テッペンランド／てっぺんらんど)

SHIGEKO DOI

土井 茂子

天辺地

(テッペンランド／てっぺんらんど)

「文明の通り過ぎた跡には砂漠が残った。それはかつての歴史が証明している。―古くはメソポタミア文明、インダス文明、その後継者としてのギリシヤ、ローマ文明。」

米国の文学者にして詩人のソローがいみじくも言った言葉通り、「文明国・ギリシヤやカルタゴ、ローマは、かつてそこにあった原始林に蓄えられた腐植によって支えられていた。文明は、土壌の存在においてのみ存続することが可能である」と。

旧約聖書の時代よりもう少し遡るころから、フェニキア人はレバノン杉を伐採し船を造り、商人として地中海に乗り出した。北アフリカからスペインにかけて彼らは多くの植民地を開いた。人口も増え、レバノン杉を切った跡地は放牧地として利用し、また畑にした。

しかし、杉林が減少するにつけ、土壌は水を保つ力を失い始め、降雨はむき出しになった土壌を押し流し、港や海岸線を埋め立て始めた。この土壌流亡により、山腹や丘の上から肥沃な土が失われ、そこは二度と杉が生えることのない、不毛の岩山となった。

―今こそ、農業を原点から、ゼロから見直す時が来ていると思う。

名指しのご批判をいただき、「新聞に顔を売るな」「テレビに出るな」とのご忠告をいただく。

しかし「群盲象を撫でる」の批判を敢えて甘受する覚悟で、群盲の一人となった。

叩かれよう、誇られよう。温厚な沈黙の人となるよりも、おしゃべりな伝道者になろう。

そして、伝えたい心は一つ、二十一世紀は間違いなく農業と環境の時代であり、北海道農業は無限の可能性を秘めている。その未来に向けて共に跳ぼうと。

(『北海道 いま農業が面白い』)

まだ雪の深かった三月初めの頃より、少しずつ、二冊の本を読み直しています。本の著者、相馬 暁先生に初めてお会いしたのは、十一年前の二〇〇二年三月下旬のことでした。

一九九八年の十月末、思いがけず約七年ぶりに北海道へ戻ってくる事ができた私は、その後、都会の暮らしを経て一層強く感じるようになっていった人の世への思いを日毎に深め、日本の



佇まいの行く末と、静かに滲えられながら出流る時を待つ清水のような北海道―アイヌ・モシリ―の天与の役割に、深く思いを廻らすようになっていました。

そのような折、新聞に掲載されたお知らせを目にして以前から存じ上げていた先生のお話を生でお聞きすべく、石狩市で開催された「元気が出る農業フォーラム in いしかり」に向いてみたのです。「天国と地獄、そして地獄からの脱出の道」と題する基調講演をお聞きしたのち、会場出口でお話をさせて頂いたことが切欠となつてご縁の糸を紡いで頂きました。

*

先生に二度目にお会いしたのは、旭川でした。

三ヶ月後の六月二十二日・二十三日に開催された「農と食と環境を考えるシンポジウム旭川2002」。初日第一部のパネルディスカッションに招かれた六名のお一人として登壇され、「農が輝く日、北海道に明日がある」と題するお話をしてくださいました。

二日目の「牛が拓く牧場見学と野外シンポジウム」では、初日の冒頭にお話くださった齋藤昌さまの齋藤牧場に初めて伺いました。



写真は 2011 年夏のまほろば研修にて

大勢の参加者が齋藤翁を追うようにして牧場の天頂を目指し、緩やかな斜面に戻つてからは翁を囲むようにして車座になり、乳と蜜の流れる地から滔々と溢れ出るようなお話に耳を澄ませました。その様子は、まるで映画「ベンハー」の「山上の垂訓」の一場面のようでもあり、著書『いのちの輝きを感じるかい』（地湧社）のお写真のように、白い手ぬぐいが似合うそれは滋味深い耶蘇さまでありました。

齋藤牧場にはその後、一部後の懇親会でお話をさせて頂いたパネリストの

お一人でもいらつしやる三谷克之輔先生のご縁に恵まれて「齋藤昌牧場に学ぶ会」にお声を掛けて頂き、二度ほどお訪ねをしました。三谷先生からは今も尚、初めてお会いした時と変わらぬ真摯なご姿勢から発信し続けられるお言葉に、教えを受け続けています。

二〇〇五年十月に伺った二度目の「学ぶ会」では、三谷先生がお招きになつていらしたお二人から貴重なお話をお聞きすることができました。

冒険家の石川仁さまは、世界での様々な冒険と葦舟航海のお話をしてくださいました。世界各地の神話や伝説に登場する葦舟。アメリカ先住民のホピ族の祖先は葦舟に乗って大陸間を行き来していたとされ、日本では古事記に、イザナギとイザナミとの間に生まれた水蛭子が葦舟に乗せられ海に流された」と記されるそうです。葦舟という古代船を造り、古代の海洋民族が辿った海



の道を検証しておられる「カムナ葦舟プロジェクト」。その生き生きとしたお話に、惹き付けられるようにお聞きしました。

ドキュメンタリー「森の哲学者メイナク族」を上映してくださいましたディレクターの森谷博さまは、ブラジル・アマゾンの森に暮らす先住民メイナク族のお話と、ご自身にまつわる内的なお話をしてくださいました。文字や貨幣を持たず、しあわせや自然、宗教という言葉などない人々の澄んだ瞳の印象を心に残しながら、静かに聞き入りました。

学ぶ会の終了後、庭園のような牧場内に建つロッジにその夜も宿泊される大勢の皆さまにお別れを告げ、独り車で帰路につきました。

別れ際に頂いたばかりの助手席の小さな葦舟を時折目にしながら、お聞きした様々なお話や語られた皆さまの思い、森谷さまの生き方の変化に繋がる星野道夫さまとお話を、道すがら思い出していました。

そして、連なるように時を遡り――三年前の二〇〇二年十月に「ジェサップ北太平洋地域調査終了百周年記念／星野道夫写真展」で見たワタリガラスの写真のこと、龍村仁監督の著書『地球交響曲第三番 魂の旅』のこと、北山耕平さま翻案の『虹の戦士』のこと、

東京の空の下で読んでいた『森と氷河と鯨』のことを想い、静かに思いを巡らせました。

星野道夫著『森と氷河と鯨―ワタリガラスの伝説を求めて』の、あの印象的な序詞と共に。

「一人の不思議なインディアンに出合ったのは、雨の多いこの土地では珍しく晴れ上がった、四月のある日の午後だった。それが偶然なのか、何かが導いてくれたものなのか、今でもふと考えてしまう。

―「昨日、墓場でワタリガラスの巣を見つけたよ……」

それがボブ・サムとの出会いだった。」

「人間の歴史は、ブレイキのないまま、ゴールの見えない霧の中を走り続けている。だが、もし人間がこれからも存在し続けてゆくこととするのなら、もう一度、そして命がけて、ぼくたちの神話をつくらなければならないときが来るかもしれない。」

（星野道夫）

*

三度目に相馬先生にお会いしたのは、深川でした。

新天地、当麻町の風情漂う六月のお手紙に書かれていたことが愈々となり



「是非ご出席ください」とのご連絡を頂いて、二〇〇二年の九月八日。列車に揺られて「新規就農サポートセンター設立総会」へ出掛けて行きました。

熱気溢れる会場には大勢の農業関係者の皆さまが詰め掛けておられ、埋まった場内の空いた席に遠慮がちに腰をおろした素人の身に、先生はわざわざ「よく来た、よく来た。ありがとう」と笑顔でお声を掛けて席までいらしてくださいました。本当にありがたいことと思えました。

設立総会では、ご挨拶をされた方々の然るお一方に、一見にしてその人となりを感じ、頂いた式次第に記され

ていたお名前とお姿をしつかりと胸の内に刻み、深川を後にしました。

それから数年。今は、その方から息子さまの代へと引き継がれていらつしやるとお聞きした田圃のお米を頂く幸に与っています。

お米の袋に貼られた「安心・安全なお米 北海道雨竜郡北竜町 黄倉さん」というラベルの文字を目にするたびに、深川でお目に掛かった時のあのお姿を想い、唯々有り難いばかりのこの巡り合わせに、いつも感謝の内に胸の中で手を合わせています。

*

先生に最後にお会いしたのは、何時だったのでしょうか。札幌市内で開かれた新規就農希望者への会と記憶しています。

新聞に連載されていらしたコラム「さんと向き合う」。ひと回りもふた回りも大きくなられた背広を纏われた先生は、それでもあの笑顔でいらつしやいました。滲んだ笑顔で、四つの手でしっかりと握手をして、それが精一杯でした。

「時代は確実に変換点に向って進んでいます。良い悪いは別にして…。その時に向けて、貴女はその感性を磨き、行動するべき時に、鋭く叫ぶことが出来るように備えておいてください」。

お手紙で頂いた論しの言葉を胸に、

至らぬまま皆さまに教え導いて頂くばかりのありがたい道中の直中に今もいます。

二〇一二年十二月二十五日、北海道新聞朝刊二十四面のコラム「朝の食卓」を心して静かに読みました。

「きよの食卓」

農のある暮らしで知った「食」の力。この2年、食を通して「しあわせに生きる」ことをテーマにつづってきた。

昨年の震災と原発事故では、日本中が悲しみ、心を寄せ合い、痛みを分かち合った。それは1年9ヶ月たった今も続いている。私の86歳の母は、戦時中の苦しさと同様に重なっていたようだ。

戦後67年、近代化へと走り続け、未来へのビジョンを見直すことをせずに限度を超えてしまった今、得たものと、それと引き換えに失ったものの大きさを日本中が知った。豊かさの価値観、幸せのものさしが、震災を教訓に変わっていくことになる、誰もが思ったはずだ。

しかし、「経済成長」という危うい言葉が国を支配し、「いのち」や「食」は



ないがしろにされていく。青森県・岩木山の麓で安らぎの場「森のイスキア」を主宰する佐藤初女さんは「食は心の問題です」と語る。温かいご飯を食べると、深い悲しみの中でも心が動きだす。その言葉が、はらにストンと落ちた。

人々が土(大地)に戻り、命を紡ぐ食(食べ)ものを自らが耕すこと。それができないときは、分担し合い、耕す人たちとながること。きょう何を食べるかを考え、何を選ぶか。多くの苦難を抱えた世界で私たちにできることは、そんな「食卓からの革命」かもしれない。」

(湯浅優子 (ファームイン経営・新得))

「十勝で元気ががんばっているお母さん」。執筆者の湯浅優子さまのお名前を以前に先生からお聞きしていました。ですから連載が始まって以降、毎回を心待ちに読ませて頂いていました。

しかし、九月の初旬。朝刊の社会面に小さく載っていた痛ましい農機具事故のお名前と地名に胸騒ぎがして以来、いつの日か「朝の食卓」に戻って来てくださるだろうか、毎朝新聞を捲るたびににお名前を探し続けていました。そうして三ヶ月。クリスマス朝の朝、

贈り物のように届けられた最後のお話でした。

大切に切り抜いて幾度も読み返している「きよの食卓」。「温かいご飯を食べるとき、深い悲しみの中でも心が動きだす。その言葉が、はらにストンと落ちた」。この一文に差し掛かるたびに、籠められている思いの深さを胸にして、新得の彼方へ唯々お祈りしています。

*

「都市と農村では時計の針の進み具合が違う。ゆつたりとした時の流れに浸って、孤独とともに、何者かに生かされている自分を感じる時、人は心の充足を得る。目に見える物だけが真実ではなく、見上げるような大木や道端の道祖神に木霊や精霊を感じ、峠を吹き抜ける秋の風、夏の入道雲に、命の投影を感じる人生の方が、どれほど豊かで安らぎを与えてくれるか。人は自然から離れては生きていけない。自然なだけでは人の心は枯れていく。」

自然界も、人間社会も、坂道ばかりでなく、階段もある。坂道を上るような連続的变化、反応でなく、階段を一段上がるような、ある閾値を超えると、生ずる反応、変化もある。同様なことを私たちは経験している。ベルリンの



壁の崩壊とそれに続くソ連との同盟国の崩壊である。それは直前まで誰もが予想し得なかった。情報通の評論家も政治家

も、想像出来なかった。ドイツ統一の夢は、あくまで長い年月をかけて実現される夢であると思われていた。しかし、静かにかつ着実に市民の心の中に、変革を求める意識が高まり、統一への願望が閾値を超えた時、まさに山が動き、大津波が押し寄せてきた。そして一夜にして世界は変わった。

変化を求める潮流は北海道各地にうごめいている。間違いなく今、北海道全域で、大きな底流として変革の波が、動きが待望され、胎動が始まっている。今こそ、自らの意識を変革し、進むべき方向性と理念を明確化し、実践に移そうではないか。

北海道が日本の北の外れに位置するなんて考えないでおこう。中央から遠い北海道こそ、歴史的な背景が明らかに異なる北海道こそ、独自の考え方を生き方を打ち出し、地方の時代に先鞭をつけるべきである。日本の頭・テッペンに位置するテッペン(天辺)ラン

ドであると自負し、北海道発全日本北海道発全世界へ、情報を、技術を、知恵を発信しよう。まさに北海道こそ、日本の頭・テッペンランドであり、精神的独立を果そうではないか。」

(『2020年 農業が輝く』)

土地に眠るたましいを揺り起こすよ
うな、相馬暁先生からの呼び掛け。

後藤三男八さま、佐藤晃明さま、先達より受け継がれる魂 黄倉良二さまの箴言「天を守り、地をはぐくみ、人を育てる。農業の基本はここにある」。

農村のいとなみと先人を偲ぶとき、幼いころ就寝時間を過ぎた後に惹かれるように見ていた「新日本紀行」の、斎藤翁のお顔にも似た且つての人々の面影が浮かび、拍子木の音と共に「祭りの笛」の調べが胸の中に響くような思いがします。

私たちは今、何処に

向おうとしているのでしょうか。

私たちが紡ぐ神話は、

何を語るのでしょうか。

「食は命」

文明の喧騒を照らし出す驕奢な電灯のもとには隠されていて、空には小さな星たちが煌めいているように、見

える糸、見えない糸で繋がりが合っている多くの皆さまの確かな光を感じます。

「いかに些細にみえることでも、それ単独で起っていることなど、この世には何ひとつない。全てはあらかじめ繋がって起っている。だから、繋がっているか否かなど思い煩うことなく、自分にできることを自分の場で、ただ誠心誠意行っていればよいのです。」

天と地の、小さな星々の光を映した一滴が水面の上に零れ落ち、一羽の蝶の羽ばたきが聴かぬ風を呼び起こすように、この青い水の惑星―地球―を静かに包みこむようにして広がって行く波紋の様を胸にして、ドライ・ラマ法王の言葉と共にこの夏を迎えます。

